

Yクラス報告 「日本語を思い出そう」

若松るり子

センターに每期新しく入所してくる学習者の中に一人か二人、子供の頃の日本語の記憶をもっているのかもしれないと思われる人々がいる。中国での日本語の学習経験もないし、時には、開講前に行われるクラス分けテストでも、日本語の点数も取っていないのに、教師が話す日本語を何か理解しているような様子が見えるのである。例えば、うなずいたり、中国語だが答えたり、教師が話す日本語をきれいに反復したり、または、カタコトの日本語で話しかけてくるのである。

子供の頃以来長い間使うことがなく、自分でも忘れてしまったと思うことばでも、再びそのことばが使用される環境に戻され、なつかしい人々や場所に巡り合った時、ことばのシャワーの中で古い体験や記憶がよみがえり、同時に身体が覚えていたらしいことばの記憶も呼びさまされ(これは本人の自覚がない場合もあるが)、短期間のうちにそのことばを回復した例をセンターの学生の一時帰国時の体験談として、時々聞いている。通説ではことばの学習は人の誕生時から始まって、5、6才頃までには知らず知らずのうちにその言語の何であるか、即ちことばの基本的な型や構造、使われる音の聞き分けや発音の仕方を大方、習得し終わるようだ。そして、そのようにして習得したことばは環境などの変化で長い間、全く聞いたり話したりすることがなくても、完全に忘れてしまうということはないのではないかと。そして、再びそのことばが話される環境に置かれた時には、自然に思い出することができるのではないだろうか。

センターに入所する帰国者の中に、このような日本語を思い出す人々がいることは確かなことであり、彼らは日本で生活を始めるようになれば、日本語の洪水の中で自然のうちにも早晚再び日本語を取り戻すであろう。だが、日本社会での一步を踏み出す前に、折角センターで学習するのであるから、できれば少しでも早く子供時代に習得したことばを思い出すとともに、新し

い、または、一般的大人の語彙や表現方法が適確に補足されることが望ましい。そして、そのためにはセンターでもできるだけたくさんのいろいろな種類の日本語を聞いたり話したりする方が効率がよいにちがいないと私たちは常々想像していた。それに、彼らの周りに起こるいろいろな場面からことばを拾っては、思い出したり、推測したりしながら語彙や表現を増やしていけるとはいつても孤児本人はすでに年令も高く、今後、経験できる生活や社会的な場面にはかなりの制限があるので、出会うことばも限られる。センターで、いろいろな状況のことばの学習ができれば、思い出したり新しく習得したりできることばもそれだけ多くなる。

しかし、現実には一人二人のために特別なクラスを作ることは困難で、彼らも学習適性別の一般クラスの一員となる。彼らはどうしてもクラスの中で、特に聞き、話す力の伸び方が著しく速いので、他の学習者たちと歩調が合わなくなる。授業内容は、学生の多数の方に合わせられることが多く、彼らにとっては、足踏み状態になるし、他の学生たちの練習の邪魔にならないように、例えば、他の学生たちのために通訳したり、発話の仕方を教えたりしないように、極力彼らの力は抑えられることになる。宿題や授業内の課題にも多少は個別の対応も可能であるが、これにも限度があり、教師としては、気の毒に思いながらも事情が許さないのでは仕方がないのである。それでも、彼らは教師の話す全てのことばやセンター外のあちこちで出会ったことばによって、修了時には、それなりの成果は得ているようである。

センターでは新しい期の開始前に行われるクラス分けテストの結果で暫定クラスが編成され、一週間前後クラスの様子が観察されるが、第39期のこの期間には、あちらこちらのクラスに「どうも日本語をおぼえているようだ」と見られる学生が数人いることが報告された。彼らは学習適性的には多少のバラつきはあるものの、クラス運営に支障をきたす程の差ではなく、中国での生活環境もよく似ていることもあり、小さなクラスだが思いがけず、「日本語思い出しクラス」が作られることになった。とにかく、できる限り日本語を聞かせてみたい。記憶を刺激することにより、埋もれていたことばが掘り起こされるかもしれない…。以下は、第39期Y：「日本語を思い出すクラス」の実践報告である。

学生は47才、52才、54才、57才、58才の男性3名女性2名の5名で、終戦時の年齢は0才から11才まで、うち4名が残留婦人である母親と戦後も何年かは一緒に生活していたようだ。だが長い間、家の中でさえ日本語を話すことは身の危険をとまなうことであつたので、彼らが自由に日本語を話す環境にあつたのは、終戦までの、長くても10才前後までである。4名のうち1名は終戦4か月後に生まれたが、母親がたまたま日本語のわかる朝鮮族の男性と再婚したため、少し日本語を聞いて育つたのであろう。彼らの中国における日常語は3名が中国語、1名が朝鮮語、1名がモンゴル語であつた。勿論、日常的な会話のための中国語には全員不自由しないと言つていた。

また彼らの学校教育の経験は少なく、0年1名、日本の小学校2年修了1名、中国の小学校3年中退、修了各1名、中国の小学校と朝鮮族の小学校をそれぞれ5年と4年修了が1名であつた。彼らは独学や少ない学校教育で学んで、中国語の身近な単語やセンターのテキストの中国語文も簡単な表現は読めるものもあるが、書くことは非常に困難であつた。

開講時、彼らが日本語を聞き取ったり話したりできる力については、コミュニケーションの力の養成と、後にセンターでの日本語学習の成果を測るために全学生を対象に行われる日本語による面接や、このクラス独自の日本語による聞き取り調査の結果、年齢、来日年月、中国での生活などについての簡単な質問の内容は大体理解し、答えることができた。勿論やりとりのスムーズさでは一人一人に差があつたし、発話するにしても、「うん」とか「そう」の他は1語文、2語文の子供のような言い方であつたり、方言であつたりした。そして、これは、また子供の時習得した日本語をそのまま保持していただけてではなく、全員がそれぞれ20年近く前（当時29才～45才）、日本に一時帰国して4か月から半年間滞在していた間に思い出し補充されたが、再び中国に戻ってから長い時間がたつたので、本人たちはまたすっかり忘れてしまつたと思つていた日本語であつた。そして、たとえ忘れてしまつたとしても、20年近くも若い時代に日本語を思い出す機会があつたことは、彼らの日本語回復のために幸運であつた。彼らは一時帰国当時を振り返つて一様に、「はじめは聞いても全然わからなかつた。だんだん、わかるよ

うになった。心の中でわかるようになった。」と言った。

日本語の文字に関しては、日本の小学校で2年間学んだ男性が平仮名、片仮名の読み書きが少し、一時帰国時に小学校1年の教科書で練習した男性が平仮名50音の読みができた。また、4名は農業従事者で、工員だった1名も20才までは農場で働いていたし、その後働いていた工場も農村にあり、社会経験から見た意味で彼らの視野は狭いものだった。

学生たち一人一人に尋ねても、いつまで、どのように日本語を使っていたか、また彼らにとっては第二言語であろう中国語や朝鮮語やモンゴル語を、どのようにして覚えたかなど本人も今まで考えた事もないし、思い出すこともできないというので、はっきりしたことは言えないが、彼らは複数のことばを話せるが、どのことばもあまり教育的な訓練を受けたものではなく、なおかつ、社会的視野も拓げにくい環境にいたようなので、語彙や使える表現の型は限られていたはずである。ただ、これも断言できる材料はないが、彼らが生後数年間にもっとも多く聞き、話し、そのことばを使って考えたことばは日本語であったと思うのである。したがって、彼らは概ね日本語の音を聞いたり、発音したりすることには慣れていたことがあり、また日本語の型や構造も体得していたと想像できる。

センターでの学習は、帰国者が退所後、周囲の援助を受けながらも何とか自力で生活していく自信がもてるように手助けするのが、大きな目標である。そのために、たとえ日本語が不完全な場合であっても、何とか日本人とコミュニケーションをとるための助けとなる手やからだの動きなどを使う非言語的手段もふくむ有効な方法を習得させることにも大きな指導が注がれる。しかし、このクラスの人々は「日本人が日本語ができないで、手まねや動作をするなんて、みっともない。子供みただし」と情けながる気持ちが強かった。

クラスが始まってしばらくして分かったことは、彼らが他のクラスの孤児本人たちに比べても、より日本への帰属意識が強く、帰国して日本語を学ぶ状態に安心し、楽しんでいるように見える反面、自分たちは、どんなに頑張っても言葉も自由に話せないのだから、日本人としては非常に劣っていると評価しているらしいことだった。「ばかだから」「頭が悪いから」「日本語

が分からないから」「学校に行っていないから」などと言い、何事につけても控えめで、自分の考えや意見などはなかなか表明しようとしなかった。そして、「こんなことしか話せない」「こんなことくらい話せてもダメ」と自分は一人前には話せないのだとマイナス評価しかしないことが多かった。

センターでの学習のうち、日本での生活に必要な知識や解説などは、中国語を使って導入することも多いのであるが、このクラスではできるだけたくさんの日本語を聞かせたい、話す機会を与えたいというわけで、基本的に授業はすべて日本語のみを使用することにしたかった。

教師が日本語のみで説明したり、学生とやりとりをするといっても、学生の日本語の語彙量や聞き取る力には、非常に大きな制限がある。しかし教師はできるだけ自然の速さで話し、発音はどうしても少しはっきり目に言うことにはなるが、使用する語彙の難易にはあまり配慮せず、学習者の理解できない語彙や表現は、他の異なる単語や言い回しで言い換える。黒板に絵や文字をかいたり、動作をしたりする。これは、教師も学生も、かなり根気のいる作業である。しかし、彼らは一日中、日本語ばかりを聞いていても、日本語ばかりでやりとりしても、いやな顔をしたり、パニックに陥ったりしないだけでなく、飽きることもなく、日が経つにつれて嬉しそうな表情になりクラスの雰囲気も和やかになってきたので、この方法でいけると判断した。彼らは、ことばを選んで聞くことができる、即ち、ことばの流れの中で、自分に不要な要素を聞き流すことができるので、疲れないのではないかと。

このクラスはYと名づけられたが、参考までに、ここに「第39期Yクラス目標」を、当時提出したものに少し補足して記す。(センターでは期のはじめ、クラスのメンバーの様子が大体わかったところで、各クラスの担任は1期どのようにクラスを運営していくかという指導方法や達成目標をたて、そのクラスの授業に関わる教師の参考にしてもらうことになっている。)

学習者タイプ: 全員判明孤児および残留婦人二世 / 学歴なし ~ 小学校5年卒業 / 中国語においては非識字者ではないが、独習の部分が多く、程度は低い / 日本語は幼少時代に話していたり、一時帰国時または今回の来日で思い出している、もしくは思い出す可能性がある(子供ことばや方言が多いが) / 男性3名、女性2名 / 47才 ~ 58才

退所後の予想される生活:

家庭生活 / 地域社会での生活:

肉親の元か故郷へ帰る / 一家の主人・主婦として / 学齢期の子供・孫の親・祖父・母として

日本語学習の継続:

日本語教室で / 職場で / 身近な人々との交わりの中で
仕事: 軽作業など(フルタイム / アルバイト)

その他望ましいこと:

たとえ肉親の元や故郷に帰ったとしても、精神的に自立し、基本的な生活は早期に自力でできるようになる / 身体的・精神的健康の維持(ストレスの解消)、生きがいや自信保持のため、親戚、友人、地域社会や援助してくれる人々と付き合える

大目標:

日本生活のイメージの再構築と、そこで生きていく自信・意欲と基礎知識・基礎技能を得る(子供時代の記憶や一時帰国など「訪問者」として得た日本の生活に対するイメージの再構築・生活上のさまざまな問題の意識化・日本語の取り戻し作業・未知の日本人との接触に慣れることなどにより、日本人としての自信の確立をはかることが重要)

中目標： 基本的な生活場面についての知識を新たにし、ことばやことば以外の手段を意識して、何とか目的が達成できる

現在の日本社会に関する初歩的な背景知識を身に付け、日本社会と、その中で日本語で生活していく自己のイメージを再構築するとともに、日本での生活への心構えをつくる

長い間使用しなかった日本語を思い出し、発音・意味・使い方を確認するとともに、新たに語彙・表現方法を獲得し、それが使える

平仮名・片仮名・漢字を習得し、簡単な文の読み書きができる

{ 註：目標達成のための指導項目はC D F タイプ(第39期当時の)モデルに沿う }

Yクラス開始第1時間目の学習オリエンテーションでは、このクラスが子供の頃、日本語を聞いたり話したりしていても今でも少し覚えている人、また、全部忘れてしまったと思っている人でも何か少しずつ思い出している人のクラスであり、とにかく、たくさんの日本語を聞いたり話したりすれば、忘れたと思っている日本語を思い出すことができるかもしれないという希望をもって作られたクラスであることを話した。教師はすべて日本語のみで授業をするが、わからないことばにぶつかったら、その場で教師に質問すること、そして、その場その場でことばを理解していくこと、決してわからないままにしないことなどを学生との間で取り決めた。例えば、とりあえず、「* * って何ですか」とか「* * わかりません」と言うこと。(初期の彼らの言い方だと「* *、なに?」とか「* * わからない」になったが、日本語を聞いて、自分のわからない文の要素、即ち、単語や句だけを取り出して質問することが何とかできた。)

センターで行なわれる生活の知識などを導入する授業も、すべて日本語ですることとは、すべての授業が日本語の勉強である代わりに、日本語のみを学習の目標にした授業はあまり必要でなくなる。ことばの文法的な説明や練習、計画的な語彙・表現の導入の時間は必要最少限に止め、できるだけ

自然なかたちで学生たちが、ことばに遭遇するようにする。その方が、私たちが予想できない彼らのもっている日本語を引き出したり、新しい語彙や表現を追加していくのには、よい方法と思われた。

教師の話す日本語は平易な単語と言い回しの方が当然分かり易いのであるが、それでも、そのことにあまり拘らず、はじめから、自然な大人の話し方がよいということにした。語尾も「～です／～ます」で説明し、話しかける。ただし、学生に強要はしない。教師が彼らの話し方の調子に合わせることも、時には必要である。しかし、常時では、教室の雰囲気慣れすぎたものになり、学習の場としての緊張感が薄らぎ、長い1日、教室で勉強する気持ちが維持できなくなる。単なるおしゃべりの時間になってしまうのではないかという危惧があったし、彼らが教師の話し方を自然に真似てくれる効果もあるのではと期待した。

期のはじめには、他のクラスと同じように、まず日本で生活していくために知っていなければならない知識や、いろいろな生活場面で目的を果たすために必要な行動の仕方や、使われることばの学習に重点が置かれた。内容は必要な物の買い物ができること、バスや電車を利用してはじめての所へ行くこと、電話や郵便が利用できることなどである。また自分や家族のことを尋ねられて答えたり、日付や曜日や日常生活を話題にしてのやりとり練習もした。

これらの学習では、教師が授業のために前もって準備した知識やことばを導入するにしても、必ず学生の既知っていることばや知識を引き出し、それらを整理確認した上で、それに補足追加するという形を取るようにした。これは、彼らが日本語の基本がわかっているとはいえ、全く新しい語彙や表現形式を覚えるには、年令的に非常に難しいことであるし、もともと知っていたことば、使ったことがあることばを思い出すのが、このクラスの大きな目標であるので当然のことでもあった。

また、知識の面で言えば、彼らは全員20年近く前一時帰国し、日本での生活を体験しており、各自そこから得た日本での生活のイメージはだいたい持っていた。このイメージを現在の社会状況に合った、そして一時滞在者としてではなく、定住者としての立場で生活していく場合のイメージへと再構

築を促しながら、既に持っていることばを生かしていくという方法であった。

学生の語彙や発話の型は、家族やごく身近な人々とのやりとりで使われるものの範囲内で、大体は子供っぽい言い方のように思われた。教師との会話の例を一つ紹介すると、{「ぼく、五つとき、あっち行ったの」「あっちって、中国?」「そう」「へーえ、誰と?」「ばあちゃんと、おかさんと、おとと」「お父さんは?」「おとさんは行かない」}となる。男性は東京出身者も、岩手出身者も、中国朝鮮族村出身者も全員自分のことを「ぼく」と言った。これは、彼らが同じクラスになる前からだった。女性の一人は聞き取りも発話も、他の学生たちに比べて困難で、このクラスでは無理かとも思ったが、リピートや応対が非常に日本的だった。もう一人の女性は山形出身の母親と長く一緒にいたが、ときどき私たちが聞き取れない山形弁を話した。(ここで、ちょっと不思議に思うのであるが、方言だけを聞いてきた人が、どうして教師の話す標準語がわかるのかということである。われわれが地方のことばを聞いてわかるぐらいの分かり方なのであろうか。)

さきにも述べたが、教師はもちろん普通の大人の話し方で話した。必要以上にゆっくり話したり、特別にはっきり話すことはしない。ただし、言い直したり、説明し直したりするときは、はっきり、ゆっくりになるのは当然である。学生たちは教師の言い方を聞き、やりとりを重ねるうちに、自然に用語や語尾の違いに気付き、次第にことばの使い方を理解し、自分たちの話し方も変えていった。教師もつい学生の調子に合わせてしまうことがあったとしても、それもごく自然なことであり、一段落つけば、教師はまた教師の話しぶりに戻ればよかった。他のクラスと違う点の一つは、動詞や形容詞の語尾の変化が、かなり自然に導入できることであったと思う。教師の言い方を、その場面や会話の流れにそってリピートするだけで、意味と使い方を理解する。そこで、少しドリルをすれば、以後、ときどき教師が注意をするくらいで、あまり苦労しないで習得できる。また、ある話題や場面に触発されてか、よく子供の頃のことを思い出す学生がいたが、彼は釣りの話から、釣り竿をかついで近所の大きな子たちと多摩川へ釣りに行き、暗くなって帰って父親に叱られたことを思い出した。子供の足では、かなり遠い道程の並木道を思い出しながらその話をするのだが、教師が要所、要所で彼の言いたいことを

察して、ことばを補えば、学生はそれをリピートしながらことばを思い出し、または、新しいことばを知ることになる。近所、釣り竿、かついで、多摩川、暗くなって、叱られた、並木道などである。しかし、この方法は、教師も学生の話したいことが容易に想像できるものでなければ成功しない。また、このような、一人のできごとをクラス全員の話題になるように、他の学生も興味をもつようにもっていくことも重要なことである。

Yクラスの授業形態は、あるテーマを決めて、ことばやことば以外のいろいろなコミュニケーションの手段も使ったの意思疎通の練習である「話題コミュニケーション(以下、話題コミと略)」と、「話題コミ」と「ロールプレイ」、「解説」と「話題コミ」、「ビデオ聴解」と「話題コミ」、「文字練習」と「話題コミ」というように、話題コミが中心になる教室活動が多かったが、これは、このクラスの目的のために必要であった。そして、これらの授業のほかには外出したり、ボランティアの方々に来ていただいたの「実習」もあったが、電車やバスに乗っても、お客さまと座談会をしても、結局は「話題コミ」であった。

Yクラスの授業風景を紹介しよう。まず、教師がテーマにそって説明または質問をする。教師の言っていることが理解できない学生は、わからないという意味表示をする。表情や「うん?」、「なに?」、「わからない」、それに中国語で何やらつぶやく。教師が言い換えたり、漢字や絵をかいたり、動作をしたりする。それでもわからないと、中国語が始まる。学生同士で説明し合ったり、意見を言い合ったりする。中国語がわかる教師は、この過程を聞いていて、正しい理解に辿り着いているかどうか判断できるから、学生とともに、それを確認して、また日本語の会話にもどる。中国語ができない教師も学生たちが中国語で話し合うままにしておき、落ち着いたところで、もう一度さっきの時点に戻って、よくわかったという表情の学生に説明させるか、新たに言い換えや質問で、理解を確認することになる。

結局このような、一見非能率的なやりとりの繰り返しだが、期の終わるまで約3か月間続くことになった。日常生活の身近な場面に対応する会話やロールプレイは比較的簡単にこなせるが、そこから一步踏み込んだ会話になると難しくなる。できるだけ自然な大人の会話を目指していても、正確に伝える

ために、教師はどうしても短い言い回しで、しかも言い換えを繰り返し、理解の確認をしなければならなかった。しかし一方で、この非能率的なやりとりは、まさにことばの学習の連続であり、学生たちも心得ているから、ワイワイ、ガヤガヤと收拾がつかなくなることはなく、教師とともに楽しい授業をつくっていった。

ロールプレイと話題コミの授業は、たとえば「買物」というテーマであれば、もう日本で買物をしているか／何を？／どこで？／誰と？／頻度は？／値段は高い？安い？／中国ではどうだったかなどから、話題は次第に野菜やくだものおいしさや、たべものの好ききらいにまで自然に発展してしまうのであるが、何と言って買うか／品物が見つからなかった時はどうしたらよいか／値段が知りたい時は？、などの場面を見つけてロールプレイを折りこんでいく。その場合、さきほどから述べているように、学生のもっている言い方をできるだけ、よしとするようにもっていった。

ビデオ教材もよく活用した。「ビデオ聴解・話題コミ」の授業である。ビデオは「ヤンさん」シリーズ(註)だけで12本ほど使った。ヤンさんは在日外国人で、日本の生活のいろいろな場面に登場する。Yクラスの学生たちとは少し生活環境が異なっているが、それぞれに、「えんぴつで書いてもいいですか」とか「日光へ行きました」などの題がついていて、状況を理解しながら、語彙や表現形式の勉強もできるようになっている。Yクラスのビデオ聴解の目的は、生活の中にいろいろな場面があることを知る／会話の聞き取り／語彙・文型の確認や練習などであったが、特に、画面から多くを学ぶようにした。会社や日本人のうちの中はこんな風になっているのか、あれは何か、何をやるものかなど、家具や道具やその使い方、日本人の表情や動作などにも関心を示すようにした。

Yクラスの学生たちも、他のクラスの学生たちと同じように、文字の勉強にたいへんな熱意を示した。結局、カタカナの読み書きまでができるようになった人は二人だったが、非常に努力した結果、全員がひらがなと簡単な漢字の文はゆっくりなら読めるし、書けるようになった。自分で考えた文を間違いなく書くというのは、やはり困難であったが、記憶した文を口でつぶやきながら、また、教師の読むのを聞きながら、何とか書けたのである。セン

ターのテキストの中に、学生に最も必要と思われる漢字を集め、その読み方と中国語の意味をつけた『身のまわりの漢字』がある。学生たちは漢字を少しは知っていたので、テキストの漢字も見てわかるものが多かった。その中には日本語の音でも知っているものがたくさんあったので、比較的容易に読めるようになった。振り仮名はひらがなで打たれているが、文字が小さいのと拗音や促音など、すらすら読むのは難しいので、彼らはそれを読まなくてもいいことにした。

最後に紹介するYクラスの日本語学習は、みんなで短文を作り、読む練習をしたり、その文を覚えたり、または覚えた文が聞き書きできるように練習するものである。これは、他の授業で学習したことの復習もかねていた。Yクラス編成3週間目からはじめたが、1回目は教師が学生とやりとりしながら短い文を作った。そして、最後の12週間目、17回目になる頃には、『身のまわりの漢字』の当日学んだページから、各自単語を選んでそれを使って1人1文ずつ作ることができた。それは、「復習その1」が、

今週は電話の練習をします。

実習で外からセンターへ電話をかけます。

センターの電話番号は93 - 1660です。

電話をかける時は、はじめに自分の名前を言います。

電話を終わる時は、「失礼します」と言います。

などであり、「復習その17」が、

私は今まで船に乗ったことがありません。

私は自転車に乗れません。

中国から日本まで、飛行機に乗って帰ってきました。

車に乗って、富士山の緑を見に行きます。

Kさんは東北新幹線に乗って、東京から盛岡まで行きました。

となった。

第39期が終わってから5期が過ぎたが、その間再びYクラスが編成されることはなかったので、この報告は一期のみの記録であり、不確かな部分をたくさん残している。第39期が始まった時も、「日本語思い出しクラス」に対する確固とした心構えも、専門的知識の準備もできないまま、とりあえ

ず希望的観測をもって走りはじめたので、記録もしっかりまとめられなかった。

第39期Yクラスの学生たちがよい学習ができたかということ、理想的だったという自信はないが、少なくとも居心地のよい教室で、自分たちのペースで自由に発言し、力いっぱい勉強できたように思っている。

註：国際交流基金（1984）、ビデオ教材『ヤンさんと日本の人々』